新連載　レシピを読む、楽譜を読む、図面を読む（一）

読むとはどういうことか

小野塚知二

わたしたちは日常的にいろいろなものを読んでいます。何かを読むとはどういうことなのか、また、なぜ、それは読むことができるのかを考えてみましょう。そんなことを考えると、読まない／読めないとはどういうことかが逆に浮かび上がるでしょう。また、何かが読みにくいのはなぜかを知るのにも有益なはずです。

読み取りにくい文

わたしたちの身の回りにはさまざまな文字・文章や記号が溢れています。わたしは、「近年ますます情報化と価値観やライフスタイルの多様化が進んだため、わたしたちは膨大な情報に曝され、何が本当に必要な情報なのか判別に困る事態すら発生している」といった、どこかの行政文書かシンクタンクの報告書に書いてありそうな言説はそもそも疑ってかかるべきだと考えています。それでも、わたしたちの周囲に、読める何かがたくさんありすぎることは否定しようがありません。それらのすべてを逐一読んでいたら、読む以外には何もせずに一日が終わるほどに、周囲には文字・文章や記号が溢れ返っています。

しかし、それらのすべてがすらすらと読め、頭に入るわけではありません。たとえば、政治家や、財界・企業のトップや、評論家と呼ばれる人びとが公共空間に向けて発する言葉は、とりあえず文になっているのですが（「文になっている」ということの意味は後で述べます）、しばしば、何が言いたいのかはよくわからず、意味を摑むのにたいそうもどかしい思いをすることがあります。

たとえば、「個々の事例について仮定に基づく質問にはお答えできません」という、よく耳にする答弁は、文としては読めますが、いろいろと突っ込みたくなる答え方です。将来の意思決定については、現時点では何らかの仮定をしなければ考えようがありません。したがって、こうした答え方をする政治家は、将来ありうる意思決定については現時点では何も考えておらず、そのときがきたら成り行き任せで決めると、きわめて脳天気かつ無責任に言明しているのに等しいのです。文としては成り立っているのだけど、意味は、少なくともただちには納得できず、頭を捻ってしまう、そういうテクストをこの連載では取り上げましょう。

統語論と意味論

N・チョムスキーが示した有名な例文“Colorless green ideas sleep furiously（色のない緑の想念は猛々しく眠る）.”は、統語論的に理解できる（文法的に成立している）文ですが、意味はというと、ただちに納得できる解釈を示すのはかなり困難でしょう。これは、意味はわからないが、文にはなっているものをチョムスキーが意図的に考案した文です。統語論的には文の条件を満たしているのですが、（言語学上の）意味論的には読めない（か、あるいは、相当に無理な仮定や解釈をしなければ読めない）文がありうることを、この五つの単語からなる簡単な文で示したのです。この単語を逆順にした“furiously sleep ideas green colorless”は、統語論的に非文です。文法的な規則に従っていない単なる語列にすぎないので、読み取れませんし、それゆえ、翻訳もほぼ不可能です。意味論以前に読めないものもあるのです。

意図的に意味不明のテクストを作るというのは、言葉遊びとしては古くからなされてきました。世界各地の童謡にはそうした例がたくさんあります。また、万葉集巻第一六には、舎人親王が「無心所著の歌（意味の摑めない歌）」を懸賞募集して、授賞された安倍朝臣子祖父の歌が収められています。「我が背子が犢鼻にするつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞ下がれる」（わたしの愛しい男が褌にする丸石のある吉野の山には鮎の稚魚がぶら下がっている／巻一六－三八三八。原文は万葉仮名）。文としても、和歌としても規則に則っているのですが、意味はいまひとつわからない変な歌です。チョムスキーの例文と似ています。意味はよくわからないのだけど、我が背子の褌の中に収まっている睾丸や男性器の小ささを笑い戯れているようなおかしさが感じられるかもしれません。

つまり、何かが読めるかどうかは、一方ではそれが統語論的に文である（＝文法的である）か否かに依存し、他方では、統語論的な文であっても、意味を理解できるか否か（無意味であるか否か）に依存しています。ここから先に議論を進めようとすると言語学や文法学の奥深いところに入り込まざるをえませんが、わたしには入り込めません。

珍答弁・戯歌と実用的なテクスト

さて、政治家の珍答弁集のようなものはこれまでにもたくさんありましたし、謎の迷文は日々、新聞を読んだりテレビを観たりしていればいくらでも見つけることができます。また、古き代の戯歌、遊戯歌なども、さきほどの万葉集の戯笑

歌だけでなく、たとえば英語圏の「マザーグースの歌（Mother Goose's rhymes）」も有名です。マザーグースは日本では一九世紀末には紹介され、竹久夢二や北原白秋による翻訳・翻案からすでに一世紀を経ています。

この連載では、そうした自然言語の文／文章や詩句ではなく、もう少し実用的なテクストのさまざまな形態を紹介してみようと思います。実用的なテクストとは、書き手（作成者）が、何らかの意味・意図を書き留めて、読み手（利用者）がそれを読み、理解して、書き手の意図に沿った作業・行為を進めることができるように書かれ、読まれます。少なくともそのように書かれているはずです。では、実用的なテクストは常に意味論的に明晰な意味が書き込まれているのでしょうか。官庁の通達を読んだことのある方は、それが明晰ではなく、読みやすくもないことをご存知でしょう。

実用的なテクストといっても、法律・官庁文書や契約書・約款や取扱説明書などの自然言語で書かれたものばかりでなく、専用の記号体系を駆使した「テクスト」もあります。この連載では、具体的にはレシピと楽譜と工業図面を取り上げて、読みにくい苦労を経験してみましょう。

楽譜は世界中に実にさまざまな記譜法がありますが、五線譜を取り上げます。わたしが一番慣れ親しんでいる記譜法が五線譜であり、おそらく本誌の読者が最もよく知っているのも五線譜だと考えるからです。図面は、若干の例外を除くなら航空機の三面図（ないしその一部）を取り上げます。機械の一部（たとえば、内燃機関の吸気弁・排気弁の駆動機構）を表現した部分詳細図や部品の製造図面だと、その機械全体の構造や機能を知らなければ、図面が何を表現しているのかわかりませんが、航空機はあらゆる機械のうちで、その機能や性能が外形に最もよく表現されているので、三面図を眺めるだけで、設計者や注文者が何を考えていたのかがわかりやすいのです。

さて、レシピと五線譜と工業図面のうち、自然言語（に近い仕方）で記載されているのはレシピだけで、楽譜や工業図面には、通常の文字はほとんど記載されていません。それらは専用の記号や諸種の線で記されています。それでも、それらはやはりテクストとして書かれ、読まれています。

非文の楽譜や図面

テクストとして書かれ、読まれているわけですから楽譜や図面にも何らかの統語論的な規則があるということになります。そうだとすると、チョムスキーの非文例（"furiously sleep ideas green colorless"）のように、文法的に成り立たない楽譜や図面を作ることも可能です。

図面で一番わかりやすい非文の例は、騙し絵です。たとえば、次の図は、一見すると高架の水路から滝が落ちる見取り図のように見えますが、描かれている構造物と滝を実際に造

ることはできません。錯視を利用して、図面の規則としてはありえないものを無理に描いているのです。これは意図的な非文の図面ですが、意図的ではない非文の図面もあります。ある機械の現物を見せて、その三面図を描かせると、機械を構成する複数の部材が同時に同一の空間を共有してしまう（いわゆる「取り合い」の）三面図を描く学生や製図工が必ずといっていいほど出てくるのだそうです。これは作図者の錯覚や思い込みに起因する非文です。

五線譜の場合、非文は少なくとも二重にありえます。一つは単純な非文で、たとえば、四分の四拍子の譜面なのに、小節内に四分音符四拍分の音価が含まれていなかったり、拍の頭が上下に揃っていなかったりする譜面です。これは「取り合い」の図面と同じで、楽譜を書いた者の錯覚や思い込みや書き誤りに起因する非文です。もう一つの非文は、ちょっとややこしいので、回を改めて再び詳論しますが、そもそも五線譜が開発された時代（近世～近代）には想定されていなかった音楽を記譜する場合に発生します。具体的には、いわゆる現代音楽（の一部で、七音音階（heptatonic scale）、拍節構造（metrical structure）、および三和音に基礎付けられた調性感（onality）などのヨーロッパ近世・近代に固有の音楽的嗜好から意図的に逸脱しようとする音楽）や、ヨーロッパ以外の地域に成り立ってきた音楽（ヨーロッパの音楽学の用語では「民族音楽」）を五線譜で表そうとすると、「ありえない」楽譜ができてしまうのです。いずれも一九世紀末から二〇世紀に発生した事態です。これは記譜法の規則をどこまで厳格に考えるかという問題でもあります。五線譜で表せるのが音楽だと考えてきた音楽学の統語論の枠内で何をどこまで表すことが可能であり、どこからが音楽の意味論上の問題なのかということがでもあります。つまり、ヨーロッパの近代音楽では統語論と意味論はそれほど截然とは分離できていないのです。

むろん、文法的に成立しないテクストは実用的には役立たないので、仮にそうしたレシピ・楽譜・図面が書かれたとしても、文法的に修正されて、統語論的に読めるものに改善されるでしょう。したがって、わたしたちが通常、目にするレシピ・楽譜・図面が非文であることはまずありえません。それらの多くは統語論的には読めるテクストなのです。

それでも読めないものや読みにくいものが出現するのはなぜか、しかし、それらが「読めてしまう」のはなぜかということを考えようというのが本連載の主旨です。

おのづか・ともじ
東京大学特命教授／名誉教授